

玉鬘の和歌と人物像——知性と零落の物語展開——

古川 瑞 紀

はじめに

玉鬘は『源氏物語』中で才色兼備な女性として描かれ、源氏を始め、蛸兵部卿宮、柏木、夕霧など地位も容姿も優れた男性を虜にした。それは先行研究でも述べられている^①。次に提示するのは、鎌倉時代に成立したとされる『無名草子』から、玉鬘についての評価が書かれた部分である。

玉鬘の姫君こそ、好もしき人とも聞えつべけれ。みめ・容貌をはじめ、人さま・心ばへなど、いと思ふやうによき人にておはするうへに、世にとりてとりどりにおはする大臣たち、二人ながら左右に親にて、いづれもおろかならず数まへられたるほど、いとあらまほしきを、(中略)また、ものはかなかりし夕顔のゆか

りともなく、余りに誇りに賢々しくて、『この世にかかる親の心は』など言へるぞ、あの人の御様にはふさはしからずおほゆる。また、筑紫下り、余り品くだりておほゆる。されど、おほかたの人さまは、好もしき人なり。^②

『無名草子』の語り手は容貌や気立て、実の親と育ての親の格など、玉鬘の美点を多く挙げており、彼女を高く評価していることがわかる。更に、本文中では玉鬘について源氏と頭中将が「女の御心ばへは、この君をなんもとにすべき(藤袴)巻 三四六頁」と述べており、作中人物からも高い評価を受けていたことがわかる。

しかし、玉鬘の人生は決して安定したものとは言えない。幼くして母を亡くし、幼少時代は筑紫で過ごす。二〇歳を超え源氏の養女として暮らすこととなったが、六条院

に迎えられても実父である元の頭中将とは容易には会えず、最終的に玉鬘を手に入れたのは彼女自身も毛嫌いしていた鬚黒大将であった。そして、「竹河」巻では、玉鬘は子女の結婚や昇進が思うに任せない憤りを抱えたまま物語から姿を消したのであった。このように、玉鬘の人生は波乱に富んでおり、幸福な結末で終わらない。何故源氏や頭中将から称賛を受けるほどの人物でありながら、結末は悲劇として描かれているのだろうか。

玉鬘の人物像について、先行研究では母夕顔と比較して考察したもの⁽³⁾、形容語句や性格表現から考察したもの⁽⁴⁾、玉鬘に用いられている語句から考察したもの⁽⁵⁾などがある。しかし、玉鬘が美質を称賛される人物でありながら、悲劇の人生を描かれていることについて言及した先行研究はない。

本稿では、玉鬘の詠む和歌が玉鬘の人物像やその後の物語展開にどのように機能しているかを考察、検討していく。先に述べた通り、多くの先行研究の中で玉鬘の和歌と彼女の人物像について述べたものは管見による限り僅かであるが⁽⁶⁾、私は玉鬘の和歌に注目することで玉鬘の人物像が詳細に明らかになると考えているためである。

尚、本稿の『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』を使用している。底本は「玉鬘」巻「胡蝶」巻「蛭」

巻「常夏」巻「篝火」巻「藤袴」巻「真木柱」巻「竹河」巻は大島本、「若菜上」巻「浮舟」巻は明融本である。

一、玉鬘の聡明さ

玉鬘が物語中で詠んだ歌は全部で二〇首である⁽⁷⁾が、その多くは男性との贈答歌である。玉鬘の歌を歌の贈答を交わした相手ごとに分類すると、次の通りになる。

・源氏	∴	一一首
・蛭兵部卿宮	∴	三首
・冷泉帝	∴	二首
・右近、夕霧、柏木、兵部の君 ⁽⁸⁾	∴	各一首

これを見ると、玉鬘が交わした歌の相手の多くは源氏であることがわかる。その他は、懸想人の一人である蛭兵部卿宮や出仕したときに御自ら玉鬘の元へと足を運んだ冷泉帝、血の繋がらない兄弟である夕霧や異母兄弟の柏木である。

玉鬘が詠んだ歌の特徴として、以下のことが挙げられる。

〈A〉恋慕の歌だった場合、その意味をうまくすり替えた歌を返している(相手からの想いや自分の答えをは

〈A〉と〈B〉について具体例を挙げて見ていく。重要部分には〈A〉の場合は傍線、〈B〉の場合は波線を引いて示した（別表ではゴシック体で表記）。

〈A〉

《源氏》

篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

（篝火の煙といっしょに立ちのぼる恋の煙こそは、常に燃え立つわたしの恋の炎だったのです）

〔篝火〕卷 二五七頁

（現代語訳は私に付した。以下同様）

《玉鬘》

行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

（果てしない大空でお消しになってくださいまし。篝火といっしょに立ちのぼる、思いの煙とおっしゃるのでしたら）

〔篝火〕卷 二五八頁

玉鬘は源氏の贈歌に含まれる「火」や「煙」を自分の歌に引き取って組み込んでいる。また、源氏の恋慕を含む歌に対して、それとなく退ける歌意としている。

〈B〉

《源氏》

なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ

（いつまでも心ひかれるあなたの美しいお姿を父君がごらんになったら、亡き母君のことをお尋ねになることでしょう）

〔常夏〕卷 一三三三頁

《玉鬘》

山がつの垣ほに生ひしなでしこのもとの根ざしをたれかたづねん

（いやしい山賤の垣根に育った私の母のことをどなたがお尋ねになるでしょう）

〔常夏〕卷 一三三三頁

源氏からの贈歌に含まれる「なでしこ」や「垣」を自身の歌に引き取って組み込んでいる。また、「もとの垣根を人やたづねむ」⇨頭中将の元へと行ってしまおうのか、という源氏の歌に対して、「もとの根ざしをたれかたづねん」⇨自分の母のことを尋ねる人はなく、今は貴方（源氏）が私の親である、という意味の歌を詠み返している。尚、玉鬘は実父である頭中将に会いたいと常に願っており、その

思ひは揺るぎないものだが、ここではその思ひを隠して源氏に対して従順に振る舞っている様子が伺える。

これから推測できるのは三点である。一つは〈A〉と〈B〉に共通して、玉鬘が卓越した和歌の技巧を持っていたこと⁽¹⁰⁾。二つは処世術に長けていたこと(〈A〉では、相手からの恋慕の歌をはぐらかすことで余計な波風を立てず済ませたこと、〈B〉では、親愛や尊敬などの恋情を含まない歌には肯定の意味を示して見せたことがこれにあたる)。三つは、それらを即座に行えるほど聡明であったことである。

養父である源氏からの求愛を露骨に拒むことなく、巧みにはぐらかすことで相手への印象を悪くしない。更には、恋慕を含まない歌には素直に応じることによって、従順な女としての姿勢を示すことができる。実に鮮やかな手際であるとと言えるだろう。

二、玉鬘の零落

「竹河」巻にて、玉鬘は再び物語に登場する。「竹河」巻での玉鬘は既に夫鬘黒大将を亡くしており、残された子供達の処遇に苦悩している。次に挙げるのは、それぞれ本文

中で玉鬘やその家族が苦悩している場面であり、それがわかる箇所には傍線を引いて示した。

(ア) 長男(左近中将)が自身や兄弟の不遇さに亡き父(鬘黒)がいれば、と嘆く

「内裏わたりなどまかり歩きても、故殿おはしまさ
ましかば、と思ひたまへらるること多くこそ」など、
涙ぐみて見たてまつりたまふ。二十七八のほどにも
したまへば、いとよくとのひて、この御ありさまど
もを、いかでいにしへ思しおきてしに違へずもがなと
思ひぬたまへり。 (「竹河」巻 七六・七七頁)

「竹河」巻で玉鬘やその子供達は後ろ盾の無い状況に置かれていた。息子たちの出世は同年代の男達と比べても滞っており、長男自身も父が存命であれば、と現状を嘆いている(傍線部参照)。

(イ) 大君を出仕させなかったことで帝の不興を買った長男が玉鬘を責める

内裏には、故大臣の心ざしおきたまへるさまことなりしを、かくひき違へたる御官仕を、いかなるにかと

思して、中將を召してなんのたまはせける。「御気色よろしからず。さればこそ、世人の心の中もかたぶきぬべきことなりとかねて申しことを、思しとる方異にて、かう思したちにしかば、ともかくも聞こえがたくてはべるに、かかる仰せ言のはべれば、なにがしらが身のためもあぢきなくなんはべる」と、いとものしと思ひて、尚侍の君申したまふ。(中略)「その昔の御宿世は目に見えぬものなれば、かう思したまはするを、これは契り異なるともいかがは奏しなほすべきことならむ。中宮を憚りきこえたまふとて、院の女御をばいかがしたてまつりたまはむとする。後見や何やかねて思しかはすと、さしもえはべらじ。よし、見聞きはべらん。よう思へば、内裏は、中宮おはしますとて、こと人はまじらひたまはずや。君に仕うまつることは、それが心やすきこそ、昔より興あることにはしけれ。女御は、いささかなる事の違ひ目ありてよろしからず思ひきこえたまはむに、ひがみたるやうになん、世の聞き耳もはべらん」など、二ところして申したまへば、尚侍の君、いと苦しと思して、……

〔竹河〕卷 九四・九五頁

玉鬘は冷泉院からの要望により娘の大君を冷泉院の妻に

することを決める。しかしそれは、鬚黒大將が存命時に今上帝に大君を出仕させる旨を奏上していた事実⁽¹⁰⁾に反しており、今上帝は長男を呼び出して彼を語り、長男は今上帝の不興を買う原因となった玉鬘を責めた。また、冷泉院への出仕は現役⁽¹¹⁾の帝との結婚とは異なり、政略結婚としては最善策ではない。加えて、冷泉院には既に秋好中宮がいるため中宮の座は埋まっており、立后はありえない⁽¹²⁾。

この後、妹の中君は尚侍として今上帝に出仕する。しかし今上帝にも既に明石中宮が存在しており、中君の立后も可能性はない⁽¹³⁾。大君と中君の出仕が玉鬘達に政治的な恩恵をもたらすことは困難であり、その原因となった玉鬘の判断に対する左近中將の不満ももつともである。

(ウ) 玉鬘が自分や家族の不遇を嘆く

〔見苦しの君たちの、世の中を心のままにおこりて。官位をば何とも思はず過ぐしいますがらふや。故殿おはせましかば、ここなる人々も、かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし〕とうち泣きたまふ。右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭中將と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり。

〔竹河〕卷 一一一・一一三頁

最後まで事は玉鬘の思うように動かない。「竹河」巻の
終わり、玉鬘は鬘黒大將が存命であれば、息子達も「見
苦しの君たち」と同じように官位に悩むことなく「かかる
すさびごと」に興じていただろうに、と嘆いている（傍線
部参照）。この時点で長男は右兵衛督、次男は右大弁、三
男は頭中將の位についてはいるものの、周囲の人々よりも
昇進が遅れているようだ（点線部参照）。

「竹河」巻での玉鬘は終始不遇な状況に置かれている。
頼りである夫鬘黒大將は「竹河」巻開始前に死去し、その
ために息子達の出世はうまくいかない。更にかねてより玉
鬘に執着していた冷泉院からは長女の大君を玉鬘の代わり
として要求され断り切れずに仕させざることを決め、次女
の中君は今上帝に出仕するも立后の可能性はない出仕であ
り、どちらも政治的に有益なものではなかった。そして最
後まで状況は改善されないまま、玉鬘の嘆きを以て「竹
河」巻は幕を下ろし、その後玉鬘について描かれることは
ないのであった。

三、玉鬘の悲劇性

玉鬘が源氏の統治する六条院の空間に呼び込まれたきつ
かけは、「玉鬘」巻で源氏と交わした和歌の贈答である。
次に挙げるのは、その贈答歌である。

《源氏》

知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふる三稜の筋は絶
えじを

（今は知らなくてもやがて誰かに尋ねて知ることにな
るだろう、三島江に生えている三稜の筋のように、こ
の私とは切っても切れそうにない縁が繋がっているこ
とを）

《玉鬘》

数ならぬ三稜やなにの筋なればうきにしもかく根も
とゞめけむ

（人数ならぬこの身は三稜が沼の泥の中に根を下ろす
ように、どんな筋合いからこの辛い世に生まれてきた
のでしょうか）

〔玉鬘〕巻 一二四頁

この贈答歌を交わす前の状況を少し整理したい。「玉鬘」
巻で筑紫から上京してきた玉鬘や乳母達は偶然右近と再会

する。夕顔亡き後源氏の元で働いていた右近はこの再会を喜び、源氏に報告する。夕顔の遺児である玉鬘のことを知った源氏は喜び、早速六条院に引き取ろうとするが、彼には一つ気掛かりなことがあった。それは、玉鬘が「あやしき山里（玉鬘）巻 一一一頁」に長らく住んでいたため、六条院に迎え入れるに値する人物か否か、というものである。本文で源氏は「さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて（そのようにして落ちぶれた境遇で育ってきた人の様子も案じられるので）」（玉鬘）巻 一二三頁」と不安な心中を語っており、玉鬘の知性を見極める為の行動が右に挙げた贈歌である。

この歌の贈答に関して、今井久代氏は次のように述べておられる。

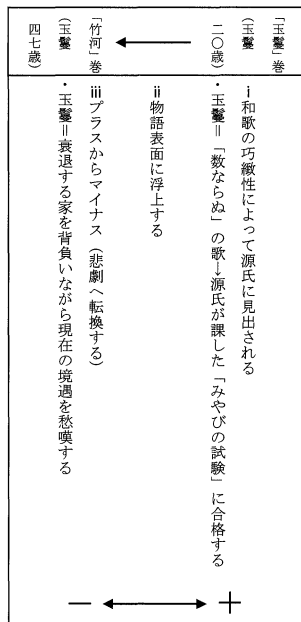
〔知らずとも〕の歌は、源氏による「みやびの試験」といえる。（中略）光源氏は微妙に標準からずれた詠歌で試し、玉鬘はさりげなく標準に戻った女歌で答えたのである¹³。

源氏は玉鬘の返歌を見て、「御心おちあにけり（玉鬘）巻 一二五頁」と安心し、六条院に迎え入れるに値する知性を持つていることを認めたのである。

こうして玉鬘は源氏の和歌による「みやびの試験」に合格することによって、物語世界へと呼び込まれたのである。

る。

一節では玉鬘の聡明さについて、二節では玉鬘の零落について見てきた。「みやびの試験」以降を時系列に並べてみよう。すると、次のようになる。



玉鬘は源氏と和歌を交わし、その才能を彼に見出されたことによって、物語の表面に浮上する。しかし、その先には「竹河」巻にて、思うようにいかない状況に苦悩を強いられたまま物語から姿を消すという悲劇的な結末が待ち構えていた。玉鬘は人々から称賛されるプラスの人物であるにもかかわらず、マイナスの人生へと導かれたのである。では、何故プラスの目立つ人物設定にもかかわらず、マイナスの結末を迎えなければならないのか。それは好印象を描かれている人物であればあるほど、転がり落ちるとき

の落差が強調され、その悲劇性が際立つからであると考へる。そして、その落差を生み出す重要な材料が、巧緻性あふれる和歌なのだ。源氏が認めるほどの和歌の才能、すなわちプラスの要素を持った玉鬘の人物像は好印象であり、だからこそ、最後に迎える悲劇、すなわちマイナスの結末はより一層、その悲痛さを際立たせる。故に、玉鬘の和歌についての能力は、優れた人物像を描き出す為に機能し、同様に、それだけの人物が見舞われる悲劇をより際立たせる要因としても機能しているのである。

たとえば、悲劇的な人生を描かれている人物でまっさきに名前が挙がるのは、おそらく浮舟であろう。浮舟は薫や匂宮に見出されて物語世界に呼び込まれながらも、両者の間に板挟みになり入水を選んだ挙句、出家したものの再び薫の接近に苦悩する。このような波乱に富んだ人生はまさに悲劇と呼ぶに相応しい⁽¹⁴⁾。

このように比べてみると、浮舟と玉鬘はその登場から最後までが似通っているとも言える。しかし、決定的に異なる点がある。それは、玉鬘とは違い、和歌の才能を称賛されないことである。次に挙げるのは、浮舟が匂宮と交わした贈答歌と、その時の匂宮の反応である。

「峰の雪みぎはの水踏みわけて君にぞまどふ道はま

どはず(匂宮・引用者注) 木幡の里に馬はあれど」
どあやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞ
われは消ぬべき(浮舟・引用者注)

と書き消ちたり。この「中空」をとがめたまふ。げ
に、憎くも書いてけるかなと、恥づかしくてひき破り
つ。(「浮舟」巻 一五四頁)

傍線部に注目したい。匂宮は浮舟の和歌の中にある「中空」を気に入らずに「とがめ」ている。『新編日本古典文学全集』は、この「中空」に対し頭注にて「匂宮は、この語に、匂宮、薫のどちらにもとも定めがたい気持を表したと解した」としている⁽¹⁵⁾。これは浮舟が、玉鬘はどうか相手からの懸想をかわす歌を詠むことができなかった、と考えてよいだろう。

和歌を咎められる浮舟と、和歌を称賛される玉鬘。この二人は共に物語世界へと呼びこまれたのち、その最後を悲劇で締め括ることになるが、その人生の落差はプラスの素質を華やかに描かれているだけに、玉鬘の方が浮舟よりも大きい。それは先に述べたように、玉鬘が源氏ほどの人物から称賛される美質の持ち主でありながら、最後は悲劇へと落ちていくためである。玉鬘ほどの和歌の才能があるか

からこそ、玉鬘の悲劇性が浮舟以上に一層際立つのである。その意味では、『源氏物語』で浮舟以上に悲劇的なのは、玉鬘その人と言えるのだ。

おわりに

玉鬘は和歌の能力を称賛される人物でありながら、晩年は没落し、報われないまま結末を迎える。プラスの能力とマイナスの結末の落差を見たとき、たとえば同じように悲劇的な人生を描かれた浮舟よりもその美質を称賛されているが故に、よりその落差の大きさが際立ち、浮舟よりも玉鬘の方が悲劇的であるとも言える。いわば、和歌の能力がプラスであるが故に、マイナスの結末を迎える稀有な存在であるとも言えるのだ。そして、その玉鬘の悲劇性の《落差》を生み出すのが、玉鬘の和歌なのである。

注

1 藤本勝義氏は「ゆかり」超越の女君（鈴木日出男編『人物造型からみた『源氏物語』至文章 一九九八年五月』）の中で、あらゆる貴公子から懸想され、相手を魅惑しつつも付け入

る隙を見せず、源氏などには理性を失わせない範囲で接触し、鬚黒の侵入の際には、自分は受け付けなかったとして、正式の結婚の形にするなど、賢い処し方を身に付けていた。と述べ、玉鬘の人物像を高く評価されている。

木谷真理子氏は「六条院の玉鬘（室伏信助編『人物で読む『源氏物語』第十三巻——玉鬘』勉誠出版 二〇〇六年）」の中で、

玉鬘は六条院で暮らし、源氏と関わる、その濃密で多様な「たくひなき」体験から、徐々に人について世について「見知」っていく。まずは外見からはじまり、ついには心の奥にある恋情にいたるまで、人間というものを学び知るのである。そして、万事よく「見知」るようになったとき、場合によっては「見知らぬさま」を装う、といった「なだらかな」な処し方も身についていたのである。

とし、玉鬘が成長と共にその聡明さを磨き、發揮できるようになったと述べておられる。

妹尾好信氏は「玉鬘論——玉鬘物語の構想と展開——（室伏信助編『人物で読む『源氏物語』第十三巻——玉鬘』勉誠出版 二〇〇六年）」の中で、

快活で親しみやすい性格と、苦勞人ゆえの冷静で聡明な判断力を備えた玉鬘は、家庭でも公職でも賢くふるまうことができたのである。（中略）「女の御心ばへは、この君をなん本にすべき」（藤袴）と讃えられた玉鬘は、女人のひとつの理想像を示しており、……

と述べ、玉鬘の内面を高く評価されている。

2 引用の『無名草子』の本文及び頁数は小学館『新編古典文学

全集 松浦宮物語 無名草子(底本は天理図書館本)。頁数は一九四・一九五頁。

3 例として、注1の藤本勝義氏「ゆかり超越の女君」がこれに当たる。

4 例として、呉羽長氏「玉鬘論——その容姿・性格表現と物語展開の連関をめぐって——(室伏信助編『人物で読む『源氏物語』第十三巻——玉鬘』勉誠出版 二〇〇六年)」がこれに当たる。

5 例として、注1の木谷眞理子氏の「六条院の玉鬘」がこれに当たる。

6 注1で触れた木谷眞理子氏の「六条院の玉鬘」や後に注13で触れる今井久代氏の「玉鬘十帖の和歌——玉鬘・蜜宮——」などがある。

7 玉鬘が詠んだ歌は次の二〇首である。

①行くさきも見えぬ波時に舟出して風にまかする身こそ浮きたれ
〔玉鬘〕巻 一〇〇頁

②初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ
〔玉鬘〕巻 一一六頁

③数ならむみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ
〔玉鬘〕巻 一二四頁

④今さらにかならむ世か若竹の生ひはじめけむ根をばたづねん
〔胡蝶〕巻 一八三頁

⑤袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもそこすれ
〔胡蝶〕巻 一八六頁

⑥声はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるら

め
〔蜜〕巻 二〇一頁

⑦あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかずなかれけるねの
〔蜜〕巻 二〇四頁

⑧ふるき跡をたづぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は
〔蜜〕巻 二一四頁

⑨山がつの垣ほに生ひしなでしこのもの根ざしをたれかたづねん
〔常夏〕巻 一三三頁

⑩行く方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば
〔篝火〕巻 二五八頁

⑪吹きみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心地こそすれ
〔野分〕巻 二八〇頁

⑫うちきらし朝ぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やは見し
〔行幸〕巻 二九四頁

⑬たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やかごとならまし
〔藤袴〕巻 三三二頁

⑭まだひける道をば知らで妹背山たどしくぞたれもふみし
〔藤袴〕巻 三四一頁

⑮心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ
〔藤袴〕巻 三四五頁

⑯みつせ川わたらぬさきにかでなほ涙のみのあわと消えなん
〔真木柱〕巻 三五五頁

⑰いかならん色とも知らぬ紫を心してこそ人はそめけれ
〔真木柱〕巻 三八六頁

⑱かばかりは風にもつてよ花の枝に立ちならぶべきにほひなくとも
〔真木柱〕巻 三八八頁

⑬ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざら
めや
〔真木柱〕巻 三九二頁

⑭若葉さす野辺の小松をひきつれどもとの岩根をいのる今日
かな
〔若葉上〕巻 五七頁

8 兵部の君の詠んだ歌を受けて玉鬘が一首詠んでおり、贈答を
交わしたわけではない。

9 贈答歌ではない兵部の君の歌を受けて詠んだ一首、女性であ
る右近との贈答歌は恋慕、非恋慕に関わることはないため除外
した。

10 「藤袴」での蛭兵部卿官の贈歌に対する返歌について注目し
たい。

心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ
(自分から日の光に向かう葵でさえも朝置く霜を自ら消すで
しょうか。まして心ならずも出仕するでもない私は、あなた
を忘れないたしません)

〔藤袴〕巻 三四五頁 (現代語訳は私に付した)
この歌については熊本県立大学卒業論文にて既に結論を出し
ている。以下に要旨を書いておく。

◆玉鬘の「あふひ」は和歌全体を見ても特殊な物であるこ
と

平安時代において、歌に用いられる「あふひ」は賀茂祭
の關係の是非に関わらず、「葵」と「逢う日」の掛詞として
用いられていることが多い。しかし、「心もて」の「あふひ」
はその条件に当てはまらない(この歌を詠んだ季節は秋の終
わりであり、四月に開催される賀茂祭とは關係がない。また、

この時玉鬘は尚侍としての出仕を間近に控えており、誰かに
会う為にどこかに出掛けているとは考えにくい。

◆玉鬘の「あふひ」は玉鬘の和歌全体から見ても特殊な物
であること

玉鬘の歌は二つの特徴がある。

A、相手の歌の意味が恋慕だった場合、その意味をうまく
すり替えて返している

⇨ 相手からの想いや自分の答えをはぐらかしている。

B、恋慕を含まない歌には素直に肯定の意を示す歌を返し
ている。

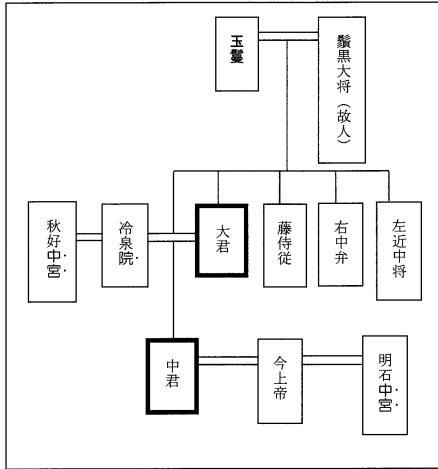
この歌に対する贈歌は蛭兵部卿官の「朝日さす光を見ても
玉笹の葉分の霜を消たすもあらなむ〔藤袴〕巻 三四四頁」
で、出仕を待つ玉鬘に自身の想いを訴えかける意味のもので
あり、Aに該当する。しかし「心もて」の歌は蛭兵部卿官の
想いについて触れ、彼女自身もそれを嬉しく思っているとい
う、相手の恋情も自分の思いも肯定した内容となっている。
これは玉鬘が詠んだ歌はほとんどが右の二パターンにあては
まる中で唯一の例外であり、それ故に特殊なものであると言
える。

◆玉鬘の和歌は、彼女の卓越した処世術(知性)を強調す
る一つの徴表であること

「心もて」の歌は、平安時代において一般的な用いられ方
とは異なる用い方をした「あふひ」を有する極めて珍しい例
であり、更には玉鬘が詠んだ歌の中でも男の想いを受け入れ
た唯一の例である。「心もて」の歌は長い間心を隠していた

玉鬘がたった一度だけ本心を覗かせる展開の鍵として存在するものである。この物語は玉鬘の聡明さや卓越した処世術を際立たせるべく、唯一、他と用法の異なる「あふひ」を配置したのではないだろうか。

11 次を示すのは「竹河」巻における玉鬘周辺の系図である。大君が冷泉院に出仕しても既に秋好中宮が存在する点に注目されたい。



12 注11の図の中君が今上帝に出仕しても既に明石中宮が存在する点に注目されたい。

13 今井久代「玉鬘十帖の和歌——玉鬘・螢宮——」（池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子編『源氏物語の歌と人物』翰林書房）

二〇〇九年」より引用
 14 先行研究として、例えば森一郎氏の「浮舟悲劇の構造」（森一郎『源氏物語作中人物論』笠間書院 昭和五四年）などがある。

15 小学館『新編日本古典文学全集 源氏物語6』頭注